



# 奥多摩伝説

もずさん

### 奥多摩伝説

彼は彼のお気に入りのバイク、TZRでひと気の無い真夜中の奥多摩を攻めていた。

真夜中とは言えヘルメット越しに吹き飛んで行く風は涼しく感じられたが、湿度が高いのであろう、妙にネットリとしていた。

「これだ！ この走りこそオレが探し求めていた『絶妙』の走りだ。」

今夜の彼は、思いのほか良く乗っていて、ヨダレを垂らすほど自分の『走り』に陶醉している。

すっかり寝静まった奥多摩の山並みには、彼のTZRに付けた「SP忠男」のレーシング・チャンバーの音だけが、甲高くこだましている。

「このコーナーを抜けると、トンネルだな。」

彼は何を考えるとは無しに、ポツリとつぶやいた。

昼間のトンネルと言うのは、明かりが灯いていると言うものの、どことはなしに薄気味の悪いものだが、夜になってしまえば街灯のほとんどない道路よりも、むしろトンネルの中の方が居心地が良いのは不思議なものだ。

彼は一つ目のトンネルを抜けると、何気なくバックミラーを見た。するとバイクの物らしいヘッドライトの光が後ろから、ついて来る事に気がついた。

「今頃オレ以外にも、こんな所を走っている奴がいるとは気がつかなかったぜ。」

彼は一気に二速シフトダウンし、TZRのスロットルを全開にひねり、タンクに身を伏せて小さなカウルの中に潜り込むと、ピタリとついて来るヘッドライトを引き離しにかかった。

二つ三つコーナーを過ぎたところで、バックミラーを覗くと、ヘッドライトはもう見えなくなっていた。彼は「案外骨の無い奴だな」と、ほくそ笑み、スロットルを緩めようとした刹那、突然背中直後で弾けるようなチャンバーの音がしたのだった。

彼は一瞬、自分のバイクの音かと錯覚したが、そうではなかった。先程あっさり引き離したはずのヘッドライトの光が、彼の真後ろに貼り付いていたのだった。彼は背中に電気ショックを

与えられたような心持がした。完全に不意を突かれたと思ったが、それと同時に「今度こそ本当に、ぶっちぎってやろう！」と、シャカリキになって飛ばす。

しかし、引き離すどころか、あべこべに背後のヘッドライトから、被せられたり、突っつかれたり、まるでグランプリ・ライダーにでも遊ばれているような有様である。

彼はもう何度も転びそうになり、執拗に煽って来る背後のヘッドライトをブロックして走るのが、苦痛でしかたなかった。しかし、ヘッドライトは、しつこく彼の背後に迫って来る。

「なんて速い奴なんだ。とてもじゃないがオレが勝てる相手じゃない。それよりもこのままでは、本当に転倒してしまう。なんとかしなければ。」

ついに彼はギブアップし、左コーナー入口で大きくインサイドをあげ、背後のヘッドライトに走行ラインを譲り渡した。すると、上手くタイミングを外された背後のヘッドライトは、彼のインサイドへ、フロントタイヤを進入させ、抜きに掛って来た。彼はようやく助かったかと思うと、ふっと安心感が身体じゅうに満ちて来た。気がつくとその着ている皮のツナギの中は、汗でビショビショになってなっていた。

だが、何か変だ。彼に上手く抜かされてしまったヘッドライトは、彼のインサイドへ進入したまま、コーナーを曲がろうとはしていない。彼のTZRと並走したままだ。

「何故だ、このままでは二人ともコーナーに直角に突っ込んでしまう。自殺行為だ！」

彼の体から冷たい汗が噴き出す。彼はパニックに陥った眼を並走したままのヘッドライトの方へ向けると、さらに恐るべき事実を目撃した！

「首が無い！ 奴の体には首と言う物が付いていない！」

まさに信じ難い光景である。しかし、確かに彼のTZRと並んで走っている奴は、首の無い、首なしライダーなのだ。

ボロボロになった皮ツナギの襟元から、何かによって本来あるはずの素っ首を、むしり取られたような、残骸だけが残されている。そして、その首なしライダーがバイクを走らせているのだ。

彼には何がどうなっているのか、わけが分らなくなっている。しかし、ハッ！と気が付いた時には、TZRのフロントタイヤが、ガードレールにメリ込んで行くのが見える。そして、激しい衝撃が彼の体を包み込んで行くのだった。

やがて、何もかもが終わりを告げ、わずかに残っていた意識の中で眼を開くと、あの首なしライダーは、彼から少しばかり離れたところでバイクにまたがったまま停車して、こちらを振り向くように身体をよじり、彼と彼のお気に入りのバイク、TZRの有様をしっかりと見届けているようだ。

しかし、しばらくすると、まるで彼の災難をあざ笑うかのように、再びけたたましいチャンバーの音を立てて、奥多摩でもひととき長いトンネルの中へと消えて行った。

彼は遠のいてゆく意識の中で、充血した眼をしばたたかせながら思った。

「あれがいつか聞いた事のある、奥多摩の首なしライダーだったのか・・・」

そう言いながら、彼は気を失った。

## 奥多摩伝説

<http://p.booklog.jp/book/81843>

著者：もずさん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukimikikaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81843>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81843>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ